Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology, Vol.15 2003

〔原著〕

子どもの動機づけスタイルと親からの自律性援助との関係

筑波大学心理学系：桜井　茂男

The relations between children's motivational styles and their parents' autonomy support

Shigeo Sakurai

問題と目的

親の養育態度が子どもの性格に及ぼす影響は古くから研究されてきたが，Grolnick, Ryan and Deci(1991)は小学生を対象に，子どもが認知している親の養育態度が子どもの動機づけの重要な要素である「コントロール理解」「有能感」「自律感」に影響を及ぼすことを見いだした。彼らは，親の養育態度として「自律性援助(autonomy support)」と「関与 (involvement)」を取り上げているが，これらは順に，子どもの行動をコントロールするために罰などのプレッシャーを与えるのではなく子ども自身が何かをはじめたり選択したりすることを励ます態度や行動（自律性援助），子どもに興味をもち子どもの活動や経験に関わろうとする態度や行動（関与）である。子どもが親の自律性援助や関与を高く認識しているほど，子どものコントロール理解，有能感，自律感は高いことが報告されている。

Deci and Ryan(1985)は，個人の動機づけスタイルをパーソナリティ特性の面から捉え「因果律志向性 (causality orientation)」という新たな概念を提唱した。因果律というのは，deCharms(1968)に端を発する概念である。彼は自分が行動の起源であることを内部因果律と呼び，このとき人は内発的に動機づけられ，反対に自分の外部に行動の起源があることを外部因果律と呼び，このとき人は外発的に動機づけられるとした。こういった考えを踏まえ，Deci and Ryan(1985)は，因果律志向性を「自律志向性」「コントロール志向性」「動機づけ喪失志向性」という3つに分類した。これらの志向性はそれぞれ，内発的に動機づけられやすい，外発的に動機づけられやすい，動機づけが起こりにくいという傾向である。自律志向性が強い人は行動の原因は自分の中にあると考え，自己決定によって行動していると認知する傾向が優勢である。コントロール志向性の強い人は外部に関心があり，成功の証となるものをつねに捜し求め，それを入手するために必要な行動をする傾向が強く，行動は外的報酬などによって統制されがちとなる。動機づけ喪失志向性の強い人は，動機づけのエネルギーがすでに枯渇した無気力状態にある。Deci and Ryan(1985)はこの3種類の因果律志向性を測定する尺度（General Causality Orientataion Scale）を開発した。わが国では田中・桜井（1993）がその日本語版を作成し，信頼性と妥当性を確認している。

そこで本研究では，大学生を対象に，大学生が認知した親からの自律性援助，つまり親が子どもの自律性をどの程度援助しているかについての子ども（大学生）の認知が，子ども自身の動機づけスタイルとどのような関係にあるかを検討する。Grolnich et al.(1991)によって親からの自律性援助は，子どものコントロール理解，有能感などとプラスの関係があると報告されていることから，自己決定感や有能感が含まれる自律志向性とプラスの関係，行動と結果の関係が独立していると認識する傾向をもつ動機づけ喪失志向性とマイナスの関係が予想される。また外発的に動機づけられやすい傾向であるコントロール志向性は，理論的には内発的に動機づけられやすい傾向である自律志向性と対照的な

位置にあることから，親の自律性援助とはマイナスの関係にあることが予測される。

方　法

被調査者　国立大学の大学生229名（男子93名，女子136名）。

調査内容　以下の3種類の質問紙尺度を用いた。

(1)Grolnick et al.(1991)を参考にして作成した「親からの自律性援助測定尺度」（原案）：Grolnick et al.(1991)の尺度項目を日本語に訳し，表現を大学生にふさわしいように修正した項目と，筆者らが自律性援助の概念に従って独自に作成した項目で構成された（Table 1参照）。父親用，母親用ともに20項目ずつである。大学生による評定は「よく当てはまる」「だいたい当てはまる」「少し当てはまる」「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」「全く当てはまらない」の6段階で行い，順に6，5，4，3，2，1点と（逆転項目についてはこの反対に）得点化した。したがって，得点が高いほど自分の親からの自律性援助の程度は高いと認知していることを示す。

(2)一般的因果律志向性尺度（Deci & Ryan, 1985）の日本語版（田中・桜井，1993）：ある状況を示す短文の後に，それぞれ自律志向性，コントロール志向性，動機づけ喪失志向性を示す行動および考えを示した項目（3項目）があり，それらに対して自分がどの程度当てはまる

Table 1　親からの自律性援助測定尺度

以下の質問では，あなたから見たご両親の養育態度や養育行動についてお尋ねします。高校生の頃から現在までの状況を思い出して答えてください。

各問いには，1から6までの数字のうちから，あなたのご両親に最もよく当てはまると思う数字を1つ選び，その数字を○で囲んでください。

1．私の親は，人に言われるのではなく，自分で考えて行動するように私に言う。	1－2－3－4－5－6
(2)．私の親は，子どもは父親の言うことに従うのが当然だと思っている。	1－2－3－4－5－6
3．私の親は，私がおかした間違いについて，私と話し合う。	1－2－3－4－5－6
(4)．私の親は，私が何か失敗すると，私を責める。	1－2－3－4－5－6
5．私の親は，私が自分で決断してやっていくことを好ましいと思っている。	1－2－3－4－5－6
(6)．私の親は，私が間違いをすると理由も聞かず怒る。	1－2－3－4－5－6
7．私の親は，私が反抗しても，落胆したりはしない。	1－2－3－4－5－6
(8)．私の親は，私の意見を聞いてくれない。	1－2－3－4－5－6
9．私の親は，私の帰宅が遅くても，すぐに怒りはしない。	1－2－3－4－5－6
(10)．私の親は，私が決めたことでも自分の意見と合わないと，自分の意見を通そうとする。	1－2－3－4－5－6
(11)．私の親は，自分の価値観を私に押しつける。	1－2－3－4－5－6
12．私の親は，私が自分の意見に従わないと，まずその理由を考える。	1－2－3－4－5－6
(13)．私の親は，罰によって私の間違いを正そうとする。	1－2－3－4－5－6
14．私の親は，私が何か失敗しても，私を責めたりはしない。	1－2－3－4－5－6
(15)．私の親は，私に指図をする。	1－2－3－4－5－6
16．私の親は，時には間違うことも必要だと考えている。	1－2－3－4－5－6
(17)．私の親は，私が反抗すると落胆する。	1－2－3－4－5－6
18．私の親は，私の意見を聞いて考える。	1－2－3－4－5－6
(19)．私の親は，私の帰宅が遅いと理由も聞かずに怒る。	1－2－3－4－5－6
20．私の親は，私が決めたことを尊重する。	1－2－3－4－5－6

Note：（　）は逆転項目を示す。項目の「親」の部分は実際の質問紙では，父親用は「父親」母親用は「母親」とし，父親用・母親用ともこの20項目から構成される。評定は「1－全く当てはまらない」，「2－ほとんど当てはまらない」，「3－あまり当てはまらない」，「4－少し当てはまる」，「5－だいたい当てはまる」，「6－よく当てはまる」の6段階で行う。

かを4段階で評定する尺度である。得点化は「よく当てはまる」を4点，「かなり当てはまる」を3点，「少し当てはまる」を2点，「全く当てはまらない」を1点とした。得点が高いほど各志向性が強いことを示す。状況文および3つの志向性項目（1セット）は12セットで構成されている。

(3) TK式診断的新親子関係検査における干渉尺度：TK式診断的新親子関係検査80項目のうちの「干渉」に属する項目で構成された尺度である。父親用，母親用ともに8項目である。「干渉」とは，親が子どもに失敗をさせないようにと口うるさく指図したり，すぐに手を出したりして，こまごまと世話をやき，子どもに責任をもたせて見守ることができない養育態度である。評定は「ぴったり当てはまる」「だいたい当てはまる」「あまり当てはまらない」「ぜんぜん当てはまらない」の4段階で行い，順に4，3，2，1点と得点化した。得点が高いほど親の子どもに対する干渉が強いと認知していることを示す。

手続き　上記の質問紙を集団形式で実施した。

結　　果

大学生が認知した「親からの自律性援助測定尺度」に関する分析結果は以下の通りであった。Table 2に示されているように，親からの自律性援助測定尺度20項目の項目平均（項目標準偏差）は，父親が2.86～5.13(1.27～1.77)，母親が3.58～4.98(1.24～1.56)の範囲にあった。同様に，項目－全体相関係数は父親が.28～.75(p<.01)，母親が.27～.80(p<.01)の範囲にあった。また，Table 3に示されているように，父親母親それぞれの自律性援助測定尺度の平均（標準偏差）は，父親が82.44(16.35)，母親が85.20(16.54)であった。男女別にみると，男子学生の平均(標準偏差)は父親が82.00(16.81)，母親が83.52(16.83)であり，女子学生は父親が82.76(16.02)，母親が86.38(16.24)であった。父親についても母親についても評定者の性による差異はみられなかった。

Table 2　親からの自律性援助測定尺度の基礎統計

	項目平均	項目標準偏差	I-T 相関	α係数
父親	2.86～5.13	1.27～1.77	.28～.75	.87
母親	3.58～4.98	1.24～1.56	.27～.80	.89

Note：n=223. I-T 相関とは項目－全体相関であり，すべて1％水準で有意であった。

Table 3　親からの自律性援助測定尺度の平均と標準偏差

	自律性援助	
	父 親	母 親
全体（n=223）		
平均	82.44	85.20
標準偏差	16.35	16.54
男子（n=92）		
平均	82.00	83.52
標準偏差	16.81	16.83
女子（n=131）		
平均	82.76	86.38
標準偏差	16.02	16.24

つぎに，父親母親それぞれの自律性援助得点の度数分布をFigure 1に示した。得点の可能な範囲は20点～120点であり，いずれの場合もやや右寄りの分布である。

尺度の信頼性（内的一貫性）を検討するためにα係数を算出した（Table 2参照）。その結果，α係数は父親からの自律性援助が.87，母親からの自律性援助が.89と高い値を示した。さらに妥当性を検討するために，父親母親それぞれの自律性援助得点と，TK式診断的新親子関係検査の干渉尺度との相関係数を算出したところ，父親で－.26(p<.01)，母親で－.48(p<.01)というマイナスの有意な相関が得られた。

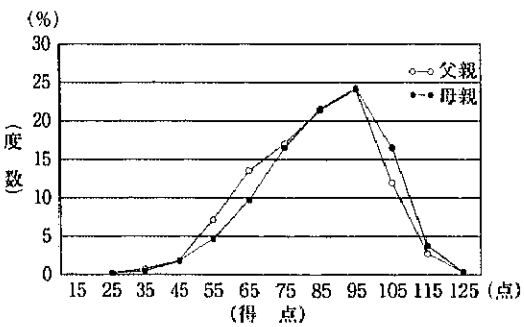

Figure 1　親からの自律性援助測定尺度の得点分布

親からの自律性援助測定尺度の信頼性と妥当性が一応確認されたので，親からの自律性援助と子ども（大学生）の因果律志向性との関係を検討した。両者の相関係数を算出したところ(Table 4 参照)，父親からの自律性援助と子どもの因果律志向性では，自律志向性と.17(p<.05)，コントロール志向性と－.05(ns)，動機づけ喪失志向性と－.18(p<.01)という相関係数が得られた。同様に母親からの自律性援助と子どもの因果律志向性では，自律志向性と.15(p<.05)，コントロール志向性と－.08(ns)，動機づけ喪失志向性と－.18(p<.01)という相関係数が得られた。これらの結果は，子どもである大学生が認知している親からの自律性援助の程度が高いほど，子どもである大学生の自律性が高く，反対に動機づけ喪失志向性が低いことを示している。

Table 4　親からの自律性援助と子どもの因果律志向性との相関係数

	因果律志向性		
	自律	コントロール	動機づけ喪失
自律性援助(父親)	.17*	－.05	－.18**
自律性援助(母親)	.15*	－.08	－.18**

Note：n=223.　*p<.05,　**p<.01.

さらに，父親母親それぞれの自律性援助得点を用いて，高群と低群（それぞれ65名）を設定し，因果律志向性得点を t 検定にかけた。結果はTable 5 に示されている通りで，自律志向性において父親（t(128)＝2.94, p<.01）と母親（t(128)＝2.31, p<.05）に，また動機づけ喪失志向性においても父親（t(128)＝3.22, p<.01）と母親（t(128)＝3.28, p<.01）に有意な差が認められた。これらは，①父親の自律性援助を高く認知している大学生は低く認知している大学生よりも自律志向性が強く，動機づけ志向性が弱いこと，同様に②母親の自律性援助を高く認知している大学生は低く認知している大学生よりも，自律志向性が強く，動機づけ志向性が弱いこと，を示している。コントロール志向性においては有意な差はみられなかった。

考　　察

本研究では，子ども（大学生）が評定する親からの自律性援助を測定する尺度を作成し，その信頼性と妥当性を確認した上で，それを用いて子どもの動機づけスタイルとの関係を検討し

Table 5　親からの自律性援助得点で高・低群に分けた後の因果律志向性得点の比較

		因果律志向性		
		自律	コントロール	動機づけ喪失
父親の自律性援助高群（n=65）				
	平均	37.62	26.77	21.86
	標準偏差	4.88	4.15	4.80
父親の自律性援助低群（n=65）				
	平均	35.06	27.75	24.29
	標準偏差	4.97	5.17	4.43
t 値		2.94**	1.18	3.22**
母親の自律性援助高群（n=65）				
	平均	37.11	26.62	22.46
	標準偏差	4.67	5.09	4.54
母親の自律性援助低群（n=65）				
	平均	35.08	27.74	25.09
	標準偏差	5.24	4.62	4.52
t 値		2.31**	1.30	3.28**

Note：*p<.05,　**p<.01.

た。

大学生が認知した親からの自律性援助を測定する尺度は，父親母親ともに20個の項目で構成され，その信頼性はα係数で確かめられた。父親のそれは.87，母親のそれは.89といずれも高い値であり，信頼性の一部が確認された。妥当性については，ＴＫ式診断的新親子関係検査における「干渉」尺度との関連で検討されたが，父親からの自律性援助と父親の干渉との間には−.26(p<.01)，母親からの自律性援助と母親の干渉との間には−.48(p<.01)という，いずれも有意なマイナスの相関が得られた。相関係数はそれほど高くないが予測と一致しており，一応の妥当性は確認されたと言えよう。

新たに作成された親からの自律性援助測定尺度の信頼性と妥当性が確認されたので，この尺度を用いて，子ども（大学生）の動機づけスタイルとの関係を検討した。その結果，予測と一致した結果は，父親の場合も母親の場合も，子どもの因果律志向性における自律志向性と動機づけ喪失志向性に認められた。すなわち，親からの自律性援助が高いと評定した子どもの動機づけは，自律志向性が高く，動機づけ喪失志向性が低いとうことであった。これは相関分析でも，自律性援助得点で高低２群に分けてのt検定でも認められた。この結果についてはGrolnick et al.(1991)の結果と一致している。

一方，予測が支持されなかったのは親からの自律性援助と子どものコントロール志向性との関係であった。コントロール志向性は理論的には自律性志向性と反対の極にあるものと考えられており，この点からは，親からの自律性援助とはマイナスの関係があるものと予測された。しかし結果は無相関であり，自律性援助得点で高低２群に分けてのt検定でも有意差は認められなかった。ただ，今回の分析では自律志向性とコントロール志向性の間には有意なプラスの相関係数（.39, p<.01）が得られており，自律志向性とコントロール志向性が対照的な関係にはないことが見いだされている。この点を考慮するならば，当該結果は妥当なものと言えるかもしれない。ちなみに，田中・桜井（1993）でも，自律志向性とコントロール志向性の間には有意なプラスの相関係数が示されており，彼らは速水・加藤（1992）ならびに桜井（1989）を引用し，わが国の子どもにおけるコントロール志向性が必ずしもネガティブに捉えられていないことを考察している。

さて，本研究で示された親からの自律性援助と子どもの動機づけスタイルとの相関係数は，有意ではあっても値は小さく，予測を強く支持するものではないであろう。このような結果を招いた原因のひとつは，被調査者に大学生を選んだ点にあると思われる。親からの自律性の援助を尋ねる際，今回は「高校時代から現在まで」という限定をつけた（Table 1 参照）。これは，親からの自律性援助測定尺度の項目中に「私の親は，私が何か失敗しても，私を責めたりはしない」とか「私の親は，私の決めたことを尊重する」などといった実際の出来事を尋ねる項目が多く含まれていたため，明確な判断ができるようにとの配慮からであった。しかし，親の養育態度が子どもに強い影響を与えるのはもっと幼いころであり，その意味からすると，小学生や中学生を対象にした研究のほうが適切であったと言える。

今後の研究課題としては，ひとつには先に述べた通り，被調査者の年齢を下げて検討することであり，二つ目には，今回は１時点のデータに基づく分析であったが，２時点以上のデータを収集することによって因果関係的な分析をすることである。

引用文献

deCharms, R. 1968 *Personal causation: The internal affective determinants of behavior.* New York: Academic Press.

Deci, E. L. & Ryan, R. M. 1985 The general causality orientation scale: Self-determination in personality. *Jounral of Research in Personality,* **19**, 109–134.

Grolnick, W. S., Ryan, R. M. & Deci, E. L. 1991 Inner resources for school achievement:

Motivational mediators of children's perceptions of their parents. *Journal of Educational Psychology*, **83**, 508-517.
速水敏彦・加藤昌弘　1992　外発的動機づけから内発的動機づけへ　日本教育心理学会第34回総会発表論文集，234.
桜井茂男　1989　小学生における学習動機の測定　奈良教育大学紀要，38，207－213.
桜井茂男　1990　内発的動機づけのメカニズム：自己評価的動機づけモデルの実証的研究　風間書房
田中秀明・桜井茂男　1993　日本語版因果律志向性尺度作成の試み 日本心理学会第57回大会発表論文集，843.
田中教育研究所（編）　1972　ＴＫ式診断的新親子関係検査　田研出版

[付記] 本研究におけるデータ収集および分析では岩田幸子さんの援助を得ました。感謝いたします。